

岩手県岩手町豊岡遺跡

草 間 俊 一

A Report of the Excavation on the Prehistoric Site
at Toyooka, Iwate Country, Iwate Prefecture
SHUNICHI KUSAMA

1. ま え が き

岩手町豊岡は、もと御堂村久保の山林地帯であったが、戦後樺太から引揚げた人々が入植して開拓した土地で樺太の豊原と真岡にちなんで豊岡と名付けられた土地である。この開拓の人々が土地を開墾する際に、ところどころから土器や石器が発見され、その一部を当地の是信寺住職山野孝順氏（岩手町水掘小学校元教諭）が所蔵していた。それが偶然筆者らの目に触れ、この地の縄文時代遺跡が注目されるに至った。その遺物によって知られる当地の縄文文化は、中期及び後期末のものであり、比較的完形を保っている土偶などもあった。その後岩手町郷土史研究会の人々がこの付近の遺跡を踏査して、地主紺野与十郎氏の住宅背後の丘陵一帯に、縄文晩期の遺物包含層が相当広範囲に広がって所在することを発見した。その後耕作その他で、遺跡が破壊されるおそれがあるので筆者にその調査を依頼してきた。そこでその一部を調査し、遺跡の状況を明らかにし、今後の保存についての措置を考えることにした。

しかし調査はほんの一小部分に留まったので、遺跡の全貌を明らかにするまでにはいたっていない。



第1図 遺跡付近地形図（5万分の1「荒屋」）×印は豊岡遺跡

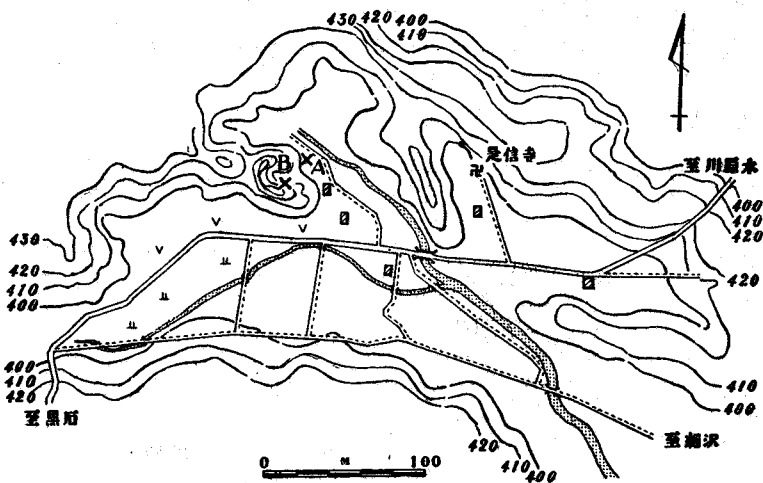
いが、その遺跡の内容は岩手県縄文晩期前半期の内容を示すに足るものがあつた。以下その調査概略について報告する。

本報告を発表するに当って、岩手町教育委員会社会教育主事亀井実氏（当時教育長代理）・岩手町郷土史研究会長内藤直造氏（岩手町助役）・研究員帷子敏雄・高橋昭治・佐々木弥右衛門・高橋与造・斎藤孝二・瀬川政雄の諸氏の御尽力に対して厚く感謝の意を表する。また宿所に当られた山野孝順氏・地主紺野与十郎氏の御好意と御協力に対し、調査や遺物の整理に当って田中定一氏・高橋哲郎氏、一方中小学校教諭勝股国男氏や岩手大学学芸学部日本研究室の諸君に多大の協力を得たことをつけ加えて、厚く感謝の意を表する。

Ⅱ. 位 置・現 況

本遺跡は東北本線の沼宮内駅と奥中山駅の間にある御堂信号所より、北西約6km入った山間部に位置し、岩手郡と二戸郡境にある七時雨山と西岳を主峰とする山陵の一端にある。東北本線に沿って北上する陸羽街道からは川原木より山道が通じていたが、近年木材搬出のために2間巾の道路に開修された。しかしこの道路は、火山灰地帯のためか、雨降りや雪融けには道路がぬかり、ジープ以外の自動車は通行が困難になる状態で、余程天候に恵まれないと徒歩で行く以外方法のない不便なところである。その山間部の沢に沿う周辺一帯の丘陵地帯が開拓地となり、約45戸が入植して豊岡開拓地と命名され、水堀小学校の分校も設立された。その分校の場所より約2km程入った紺野与十郎氏宅地周辺の丘陵一帯に縄文時代の遺物包含層があり、その面積は20アール位ある。

この地はもと山林地帯で、松林となっていたが、現在は開墾され雑穀と牧草などの栽培地となっている。調査したA地点は牧草栽培地であり、B地点は雑穀栽培地である。畑の表面には相当土器片が散乱していて、石器なども表面採集される。両地区とも行政区画では岩手町久保第1地割329番地である。（第2図参照）



第2図 発掘地付近地形図（A・Bは発掘地点）

Ⅲ. 調 査 の 概 況

調査は下記の計画で実施した。

1. 期間 昭和34年8月23日～昭和34年8月29日
2. 調査主催者 岩手町教育委員会
岩手町郷土史研究会
3. 発掘担当者 草間俊一
4. 調査員 勝股国男・板垣昭六・小野栄一・蜂谷艸平・高橋棟雄・豊口裕三

5. 協力者 佐々木弥右衛門・高橋昭治・高橋与三・帷子敏雄・斎藤孝三・瀬川政雄

第1日(23日)晴 朝盛岡を出発、正午現地に到着。午後1時より作業開始。Aトレンチ第1回目の調査開始。午後5時半終了。

第2日(24日)曇後晴 Aトレンチ第1次調査終了。本日水掘中学校瀬川政雄・坂本博見両教諭見学に来る。

第3日(25日)曇後晴 Aトレンチ第2次調査開始。

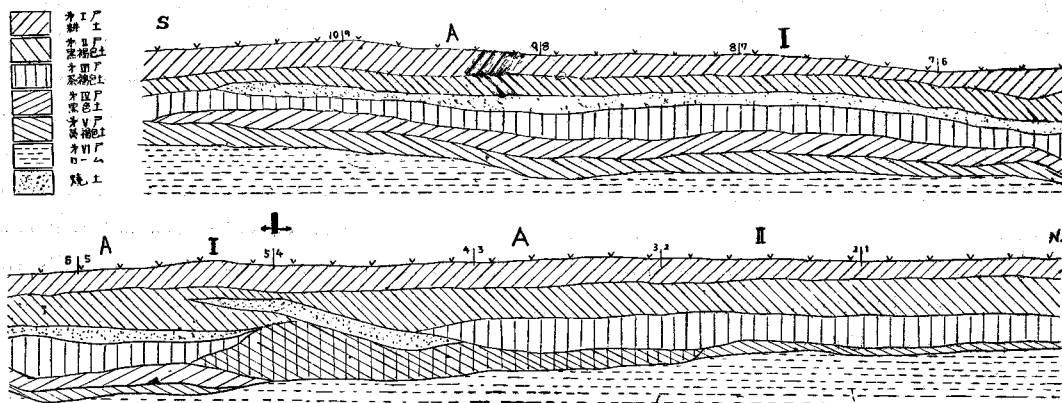
第4日(26日)曇時々晴 Aトレンチ第2次調査終了。B地点試掘す。本日水掘中学校生徒約40名瀬川教諭に統導され、作業に協力す。佐々木弥右衛門氏本日より来援。岩手町教育委員長一条忠成氏見学。

第5日(27日)雨 出土遺物の整理

第6日(28日)曇後晴 Aトレンチ第3次調査。

第7日(29日)晴 遺物をまとめて帰省。

以上の日程によって調査した概況を述べると、Aトレンチは丘陵の麓の傾斜面のゆるくなっている部分に、東西1.5m巾・南北15mの長さのトレンチを入れたもので、これを1.5m毎に区切り、北より第1区から第10区に分ち、奇数番号の第1区から第9区の5区の調査を第1次調査として調査す。第1次調査のローム層までの調査終了後、四方壁の断面図をとり、偶数番号の第2区から第10区までの5区の調査を層位的に調査したのを第2次調査として実施した。第1次・第2次の調査によって、Aトレンチの予定の調査を終了した後、トレンチの状況により更に追求を必要とした。北方への延長に東西4m・南北2mのトレンチと第1区より第4区までの東方へ1mの拡張部の2箇所を第3次調査として実施した。



第3図 A I区・A II区西壁南北断面図

B地区はA地点区の南西方約60mの位置に当る丘陵の中腹で傾斜面の幾分ゆるくなっている地点を選び試掘を行ったものである。この地点付近からは以前に土偶及び完形土器なども発見されたことがあるので、その地層状況と遺物の包含状態を明らかにするにあつた。しかし作物の関係上、若干ずれた地点の調査になったのか、Aトレンチの地層に比して浅く、遺物も壊れたものが散乱する程度で、予期した層位の状況を明らかにすることが出来なく、混在した遺物の採集に留まった。

次にAトレンチの地層の状態について述べると、Aトレンチ西壁の断面を図示したものが挿図第3図である。これによって見ると、第5区から第10区に至るまで、深さ45cm内外のところに焼土層(a層)が層をなして広がっている。これは全体が一連のように見えるが、所により濃淡があつて

相当黒土が入り混っているところがあり、数カ所に中心があつて、それが広がった形をなしているとも考えられたが、相互の区切りは明らかでない。但し第4区より第5区に広がる焼土層(b層)は1連のもので、相当の厚みと混雑物のない層をなしていた。このb焼土層が北方に下傾しているのはこの部分に後述する竪穴住居址があり、それが充分埋り切らない中に形成されたためかも知れない。

この焼土a層とb層とは第5区の断面図で明らかなように、上下の2層に分れ、b層はa層より後に形成されたことは明らかであつて、それに続く第4区から以北の第1区までの層は、焼土a層より新しく形成されたものの如く認められた。従つて第4区と第5区の境を区切りとして、北の方の第1区までは、南の方の第10区までの層より新しい手が入っているものと認められた。しかし全体を通じて見て、各層がどのように新古の手が加えられているかの順位を決定することは、相当精細に調査を進めたけれど明らかでなかった。それは長年の堆積による土圧や樹木の根の作用と、その根を開墾によって掘り起す際の攪乱、その上当時この地に住んだ人がどのような住居を営んだか、殊に住居の竪穴の深さが如何程あり、また何回位営まれたものであるか明らかでない故と考えられた。しかし兎に角第4区と第5区を境として、第4区以北の第3層は第5区以南のa焼土層より新しい層であると考えられることは明らかであるし、全体として新しい手が加えられていると考えられることは、南の方はローム層上に5層(焼土層を入ると6層)が分けられるのに、北の方は4層にしか分けられないことによつても知られる。従つて次に、第5区以南をAⅠ区、以北をAⅡ区、Aトレンチの延長部をAⅢ区として述べることにする。

AⅠ区の地層と遺物の包含状態

耕土となつていて、地表面から20cm位までが第1層で、遺物が散在していたが、土器では完形品はなかった。石器は石鏃2点・石七2点出土した。第2層は20cm～35cm位までの黒褐色をした層で遺物の包含されるものが比較的多く、第5区では完形土器が1個出土した。石器は石鏃2点・石七1点・石錐1点出土した。この第1層・第2層は焼土層の上にあり、相当他から移動して来た遺物のあることも考えられ、AⅡ区と土器の形式に類似するものもあつて、AⅡ区との地層の新古は明らかにし難い。次の第3層との間にa焼土層が10cm～15cmの厚さで広がっていた。第3層は45～60cmまで茶褐色をした層で、遺物包含層をなしていた。しかし土器などいずれも破片のみで、完形品はなく、住居址らしい痕跡を認めることは出来なかった。石器では石鏃1点・石錐1点・石斧2点・勾玉1点出土した。第4層は60cm～70cm位の黒色土層で、遺物の包含されるものはなかった。第5層は70cm～85cm位の層で、黄褐色をし、第4層と同様遺物の包含されるものは見られなかった。その下はローム層である。

AⅡ区の地層と遺物包含状態

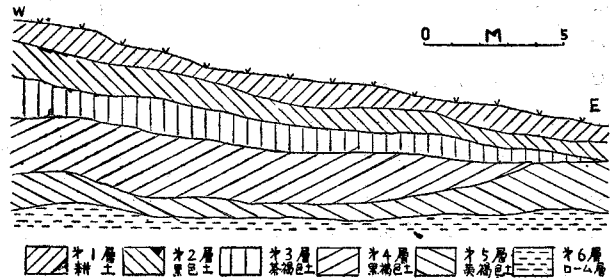
第1層は耕土で20cm位の厚さがあり、遺物が散在していたが、土器は完形品はなく、石器は石七1点出土したにすぎない。第2層は20cm～45cm位までの黒褐色層で、遺物は相当包含され、復原可能な土器や完形の土偶などが出土した。石器は石鏃5点・石七2点・石錐1点・石棒1点である。第3層は45cm～65cm位までの茶褐色土層で、遺物が最も多く包含され、土器の完形品をはじめ、土笛土偶なども発見された。石器は石鏃3点・石七2点・石棒3点・硬玉の丸玉1点も出土した。第4層は65～75cm位までの黒色土層であるが、南寄りの第3区から第4区にかけての部分は一段と下り、色も褐色味を帯び焼土や木炭の細粒も包含されて、この部分に手が加えられていることが看取された。この部分だけには遺物が包含されていた。しかも第4区の中央部ローム層上に径6cmの不整円形の深さ50cmもある柱穴らしい址も発見された。この部分は後に西側へ1m程広げた際にその端にも柱穴址が発見され、その柱穴址の所よりほぼ円形をなして掘り下げてあるような痕跡も認

められ、住居らしい輪郭を示していたが、全形を現らわすまでの時間がなかった。ただこの部分に竪穴住居が営まれたとするならば、それはAⅠ区のA焼土層形成後であると考えられ、そのためその焼土層がこの付近で切断されてしまった形をとる結果となっていると考えられる。

この竪穴住居址を想定したとき、炉がどの辺にあったかは明らかでなかった。この部分に所在するb焼土層は竪穴住居址の床面より、ずっと高い位置にあるが、この焼土層が炉として使用された焼土の堆積にすれば広がりすぎていて、はっきりした意味はわからない。あるいは土器を焼いた所かとも考えられた。

AⅢ区の地層と遺物包含状態

AⅢ区はAトレンチの北方延長上で、南北2m・東西4mのトレンチを入れて調査した第3次の調査地区である。この部分は東西の断面図を中心に説明すると、傾斜面の上方の地層は下方の地層より一段と深くくなっていて、表面は傾斜しているのにローム層面はこの部分においてはほぼ水平に近い形をしている。第1層は耕土となっている表土で、20cm内外の厚さがあり、土器片が散在する程度である。第2層は20cm～40cmまでの黒色土層で、遺物の包含されるもの少なく、土器片が散在する程度にすぎない。第3層は40cm～60cmまでの茶褐色土層で、50cmの面に遺物が一面に包含されていて一文化層を示していた。完形土器1個の外復原可能な土器数個出土した。石器は石鏃1点・石七1点・硬玉小玉1点が出土した。その下の第4層は黒褐色土層で、東側ではなく、西側の方で40cm位の厚さで存在したが、遺物は皆無であった。第5層は黄褐色土層で東側が厚くなっているが、第4層の所在するところは薄くなっていた。遺物の包含されるものはこの部分においても認められなかった。この第4層・第5層の形に人工的な痕跡が認められるように考えられるが、調査した範囲では遺物が皆無であってその意味を追求出来るまでには至らなかった。



第4図 AⅢ区北壁東西断面図

Ⅳ. 出土遺物

調査によって出土した遺物は土器・石器・土偶・土笛・玉類である。

土器

土器は縄文晩期の土器のみで、その他のものは混在していなかった。晩期の土器も、従来大洞B式といわれているものとC₂式A式といわれているものが数片混じているだけで、ほとんどがB C式からC₁式までのものが大部分である。この点筆者が昭和32年に調査した胆沢郡前沢町川岸場遺跡の出土土器が、縄文晩期の後半のものを主としているのに対して、本遺跡のものは前半期を代表するものであると考える。

本遺跡の出土土器を文様の上からA類からE類までの5種類に大別し、それら各類の文様の変化のあとをたどって、AⅠ類からAⅧ類までというように細分して考察することにした。この細分した土器の各種類が、上記した各区において、如何なる層位的関係をもって出土したかを述べて、全体としての考察を加えたいと思う。

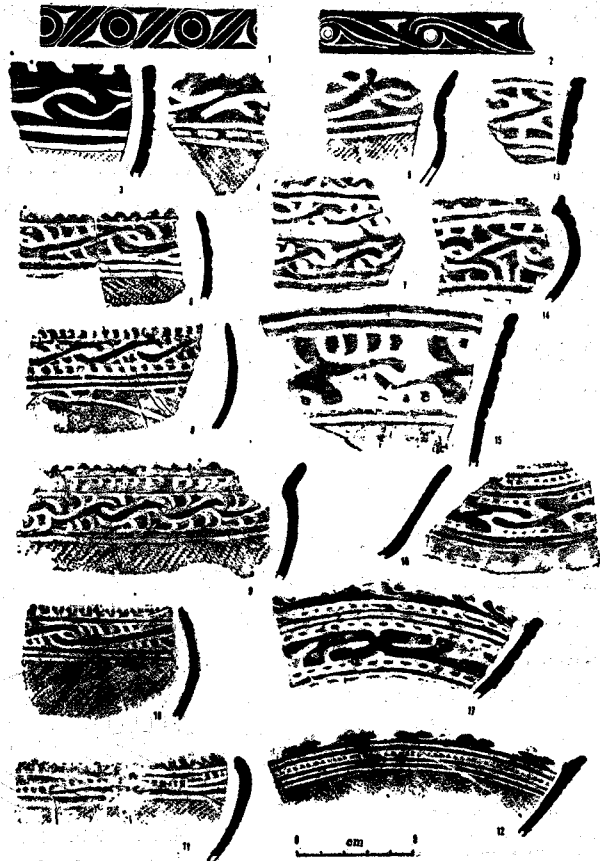
A類(挿図第5図・第7図)

羊歯状文を主とするものをA類とした。その発生の原形は安行式入組文(第5図1)を原形とし

て、大洞B式の入組文(第5図2)となり、それから変化すると見られる文様(第5図3~5)をAⅠ類とした。そのAⅠ類から羊歯状文のはじめの文様と見られるAⅡ類(第5図6・7)が発生し、それから羊歯状文の代表的な文様(第5図8・9)AⅢ類が発達したと考えられる。この羊歯状の蕨形の曲線が斜の直線となって、列点文と組み合わせあったもの(第5図10・11)をAⅣ類とした。斜の直線が口縁に平行し、その上下に口縁に平行して列点文が付けられたもの(第5図12)をAⅤ類とした。次に列点文が無くなるか、若干その名残を留めるだけで、口縁に平行する二条乃至三条の平行沈線文が主となるもの(第7図1~5)をAⅥ類とした。本遺跡の場合この平行沈線文が浅く弱いものと太く力強く数条施文されているもの(第7図6)に区別され、後者は次のAⅧ類としたものに近い感じをもつと共に、その数も少なくAⅧ類に近似しているため、それをAⅥ類とAⅧ類の中間文様としてAⅦ類として一応切り離して考えることにした。そうした場合AⅥ類はEⅢ類~EⅤ類と併存してAⅡ区を特色付ける土器をなしていた。AⅧ類は平行沈線文から工字文への変化の見られるもの(第7図8)であるが、この時期に山形文を横に連続して重ねて描いた連続重山形文(第7図9)が発生している。

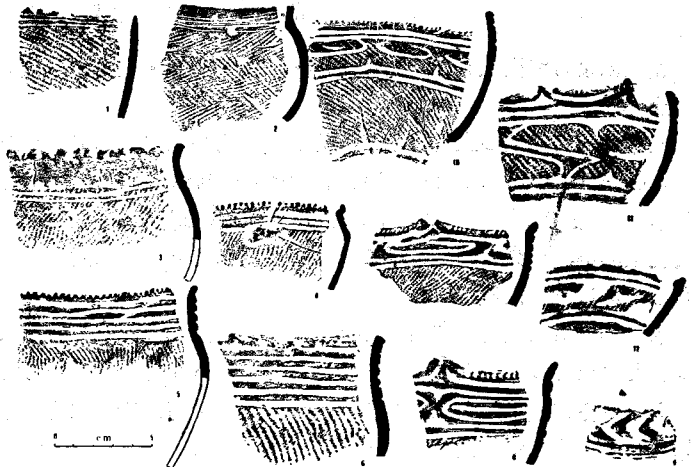
B類(第5図)

羊歯状文の一変形とも見られ



第5図 豊岡A類, B類土器

AⅠ類(3~5), AⅡ類(6・7), AⅢ類(8・9)
AⅣ類(10・11), AⅤ類(12), BⅠ類(13),
BⅡ類(14), BⅢ類(15), BⅣ類(16), BⅤ類(17)



第7図 豊岡AⅥ類(1~4), AⅦ類(5~7)
AⅧ類(8・9), EⅢ類(10~12)

るもので、発生はBⅠ類の場合(第5図13)はAⅠ類と区別が付き難い文様であるが、BⅡ類(第5図14)になって若干差異が明らかになる。BⅢ類(第5図15)は羊歯状文の一部が接続したものと見られるもので、以下BⅣ類(第5図16)・BⅤ類(第5図17)とその変化が見られるが、これ以上の変化は明らかでなく、AⅥ類に発展解消して行ったものと考えたい。なおBⅢ類はE類とした雲形文の大腿骨文様の祖形とされているが、それに類似する点も考えられるが、この場合は雲形文の流れた形として別個に考察したいが、両者に関連があったと見ることはあえて否定しない。

C類(挿図第6図1~8)

C類も羊歯状文の一変形文と見られるもので、羊歯状の曲線が上向きになっているものである。しかしその最初の文様と見られるものはCⅠ類(第6図1)としたもので、口縁部に爪形の刻み目をつけた一群である、それをもととして、羊歯状文の影響の下にあるような文様がCⅡ類(第6図2)から、CⅢ類(第6図3・4)・CⅣ類(第6図5・6)・CⅤ類(第6図7・8)と発展して行ったが、これもAⅥ類に発展解消して行ったものと考えられる。

D類(挿図第6図9~16)

B式の木窠形の文様(第6図9)を原形として、互い違いの曲線文を描いたものであるが、それは余り発達せず、羊歯状文の発展の中に吸収されて行ったものと考えられる。

以上のA類からD類までの4種類は羊歯状文が中心文様をなすもので、相互の文様発展の順位も羊歯状文の発達に則応しているものと考えられる。それに対して次に述べるE類は別個の文様をなしている。

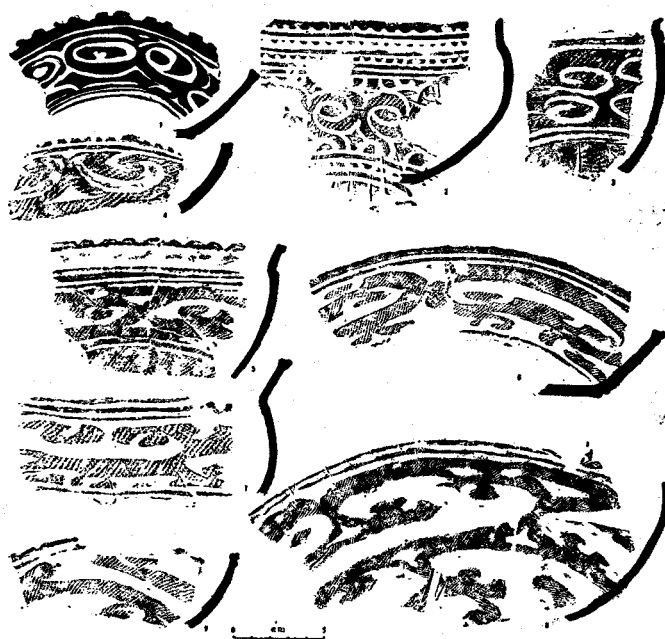
E類(挿図第8図・第7図10~11)

所謂雲形文とせられるものをE類とした。この文様について、本遺跡出土土器の文様について精細に検討するとその基本の渦巻形の楕円文を基本として、それが次第に変化して行く過程がたどれる。従って楕円乃至円形をしているのをEⅠ類(第8図1~3)とし楕円形の一部が凹んでいるもの(第8図4)をEⅡ類、楕円の一部が切断してひれのような複雑な文様が付加されたもの(第8図5・6)をEⅢ類、楕円の横への広がりが大きくなって、本来の形が不明になったもの(第8図7・8)をEⅣ類、楕円の形は全く忘れられ、斜に走る大腿骨文様となったもの(第8図9)をEⅤ類とした。口縁部の羊歯状文に平行沈線文への単純化が見られた影響か、雲形の複雑な曲線が無くなって単純なまとまりのある文様



第6図 豊岡C類, D類土器

CⅠ類(1), CⅡ類(2), CⅢ類(3・4), CⅣ類(5・6)
CⅤ類(7・8), DⅠ類(9~12), DⅡ類(13~16)



第8図 E 類土器
EⅠ類(1~3), EⅡ類(4), EⅢ類(5・6)
EⅣ類(7・8), EⅤ類(9)

となってい来たもの(第7図10・11)をEⅥ類とした。

各類土器の出土状況とそれについての考察

以上に分類した各類の土器が前記の各調査地区から如何なる層位的関係で出土したかを表にしたものが次の表である。これは各区出土の完形土器を除いた土器片を採集したもので、各破片は個体を別にすると見られるものの数である。

各地区層位別・各類土器出土表

区 域	層 位	類 別	A								B					C					D		E							
			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V	I	II	I	II	III	IV	V	VI	IV	
A	1	層	1		5	4		6					1	1			5	1	1					6		1				
	2	"	3	1	7	6	8	10			2	1	4			1			1	2			1	5		2				
	3	"	10		4	5						2				4		5	1			2	1		1					
A	1	"		2				14			1															5	5			
	2	"						14												1	1				8	2	5			
	3	"			3		2	10														1				4	6			
	4	"																						1			5			
A	1	"																												
	2	"																												
	3	"				1	1	34	5	2												1			2	11	3	6		

この表によってAⅠ類~AⅤ類とB類・C類・D類はAⅠ区に主として出土し、その中でもAⅠ類とCⅠ類とCⅢ類は第3層に最も多い。第2層にはAⅢ類とAⅣ類が多くその出土の土器を特色付けている。AⅡ区出土土器はAⅥ類の浅い平行沈線文の土器が主で、それにEⅣ類・EⅤ類の雲形

文土器が多く併存していることが知られる。しかしこの第AⅠ区出土のAⅣ類とEⅥ類・EⅤ類はAⅠ区第2層以上にも混在して発見されている。AⅢ区出土土器の主となるものはAⅥ類とEⅣ類であるが、AⅦ類とEⅥ類が混在していて、その他文様の古いものはほとんど見られずAⅣ類とAⅤ類の破片若干とDⅡ類の破片が混在したにすぎない。

以上の各類土器の層位的出土状況について考察を加えると、AⅠ類～AⅢ類は最も古い文様の土器であり、それに対応するB類・C類・D類の土器が古いものと考えて差支えない。この種の土器は従来大洞BC式を主体として、AⅠ類・BⅠ類・CⅠ類・DⅠ類の如きは大洞B式に属するものである。しかしこの類の土器はAⅠ区にもAⅡ区にもはっきりした文化層を示す程の遺物包含層がなく、破片として包含されている程度にすぎなかった。

AⅣ類を過渡形式として、AⅤ類とAⅥ類の土器はEⅢ類～EⅤ類の雲形文土器と併存して、AⅡ区を特色付ける土器をなし、上記のAⅠ区出土土器より新しい形式の土器とされる。これは従来大洞CⅠ式に属する土器であると考え、この類の土器のAⅡ区における包含状態は良好で、完形土器の全部はこの類の土器であり、その数も少なくない。この地点におけるこの類の土器の生産が顕著であったことは、AⅢ区の状況を見ても明らかであるが、AⅠ区の上層第1層・第2層に包含される量の多いことによっても知られる。このことは土器の混在で層位的関係の明らかでなかったB地点出土土器についてもいわれることで、数種の土器が混在しながらも、その中心となるものはAⅡ区を中心に出た土器と同一形式のものであると考えて差支えなかった。

AⅦ類とAⅧ類はEⅥ類と共に新しい文様形式をなすものであるが、本遺跡においてはAⅢ区において若干伴出した程度にすぎなく、十分発達していたとはいえない。これらの土器はこの後発達する縄文晩期後半の土器を特色付けるものであるが、本遺跡においてどの程度作られていたか、調査した限りにおいては明らかでない。

以上の考察によって、本遺跡を特色付ける文化はAⅡ区を中心に出土したAⅥ類～AⅦ類の土器とEⅢ類～EⅤ類の土器で、その前後の文様を明らかにし得る土器が出土し、縄文晩期前半期の文様変化のあとをたどることが出来る。

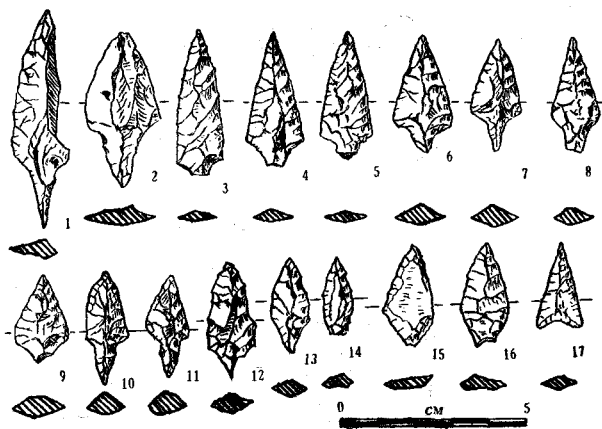
石器

石器は石鏃の一応形の整ったもの17点・石七11点・石錐3点・石斧4点・石棒3点で、計38点である。

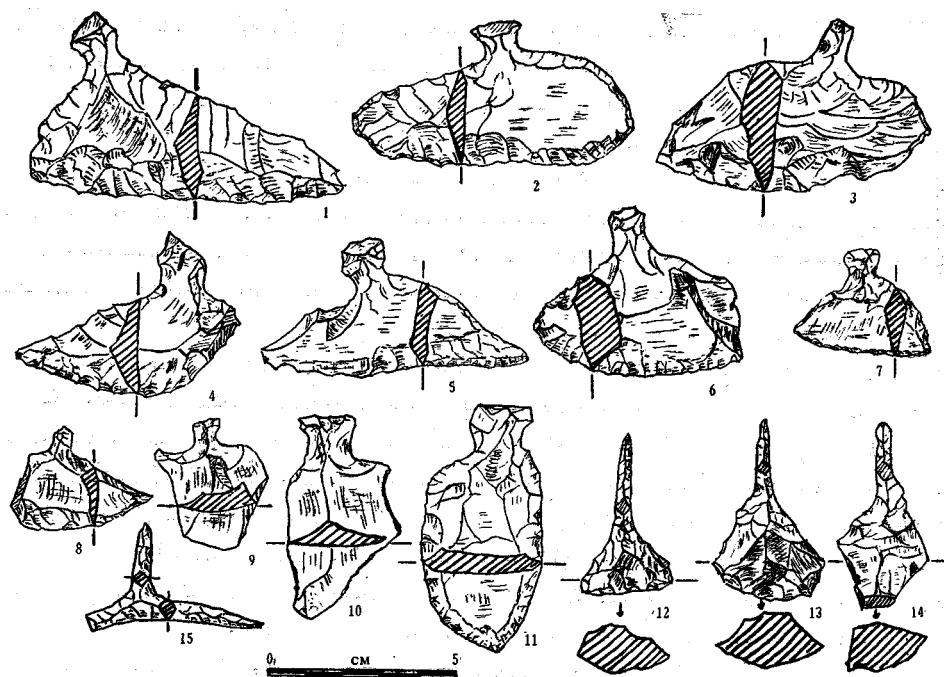
石鏃(第9図)は有茎が大部分で、柳葉形1点・無茎1点あるにすぎない。石材はいずれもチャートである。

石七(第10図1～11)は横刃形石七が多く、縦刃形石七は僅かである。縦刃形も刃部が巾広く、小刀形のものはない、石材はいずれもチャートである。

石錐(第10図12～14)は3点であるが、今1つ石錐に入れるべきか否か判きりしない第10図15に示した形のものがある。錐状の先端を有する点より考えれば、特異形石錐とすべきであろう。AⅡ区第2層より出土せるものである。石錐の石材はいずれもチャート



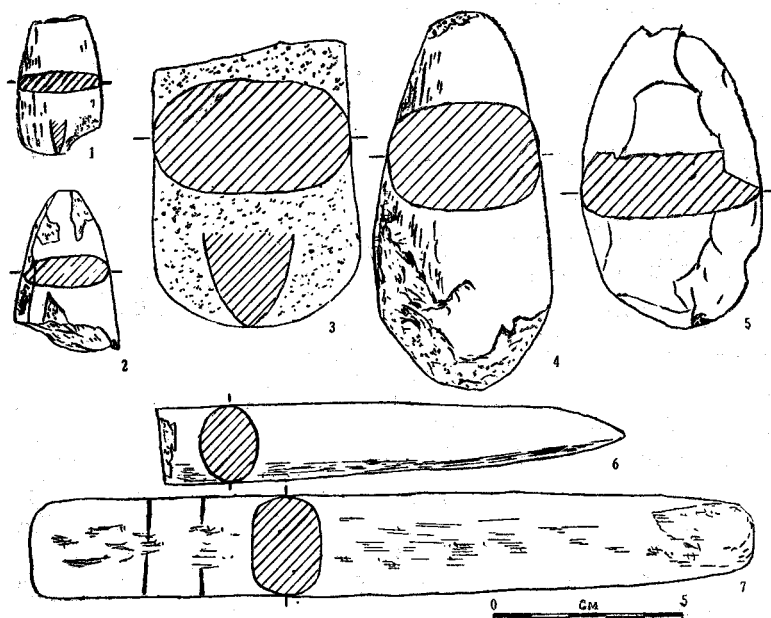
第9図 石器(I) 石鏃



第10回 石器類(Ⅱ) 石 七・石 錘

である。

石斧(第11図1～4)は数も少なく、作りも精巧とはいえない。1の小形石斧が若干良好な形をしている。石材は輝緑凝灰岩である。4のものは相当打撃を加えるのに使用したものか、刃部は磨滅して原形を相当失っている。これに類似するものに5に示した石器がある。これは一応石斧形に加工さ



第11図 石器類(Ⅲ) 石 斧・石 棒

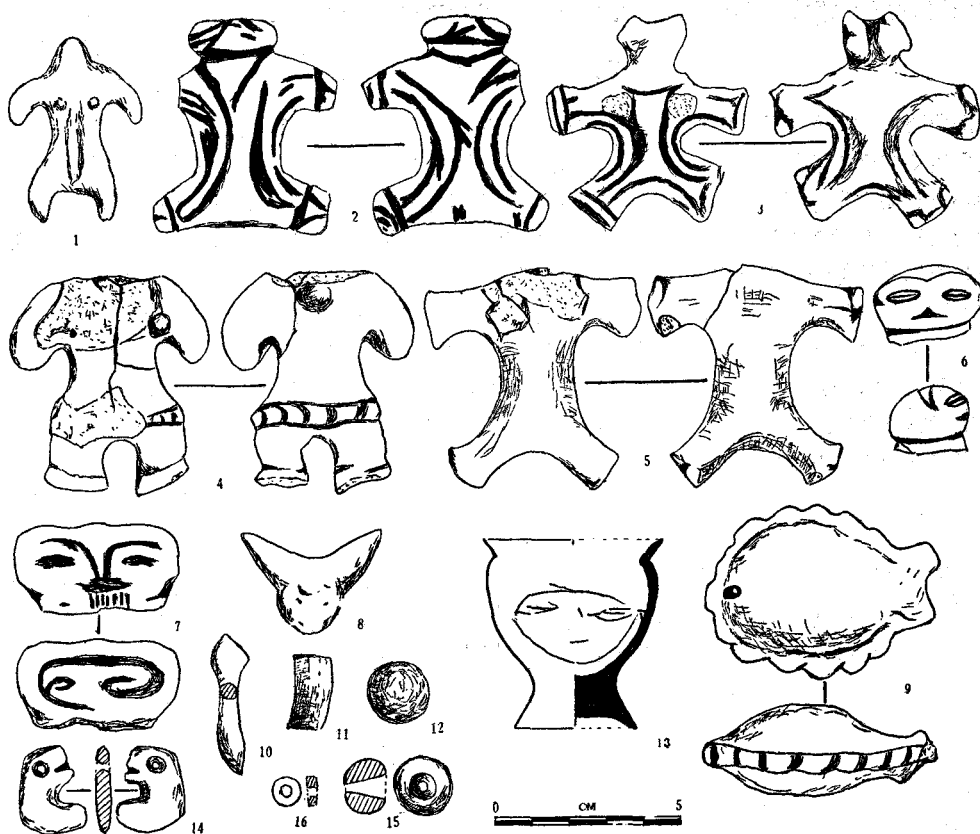
れたものが、後の打撃によって磨滅したのか、石斧形の自然石を打石器に使用したので磨滅したのか明らかでないが、打石器に使用した石器であることに間違いはない。

石棒(第10図6・7)は3点あるが、図示したものはその中の2点である。いずれも破片で完形品はなかった。そのうち1点は石剣形に先端が尖っているが、柄の部分はどうなっているか明らかでない。石材は粘板岩である。

土偶・その他土製品

土偶は完形のもの2体の外、形体のはっきりしているもの3体で、その外B地点からすでに発見されているもの2体ある。頭部や四肢の断片は数体分あり、比較的多いといえる。土偶の形体は胴部と四肢で \times 字形の形体をとっているのに特徴がある。この形体の土偶では頭部が軽視されたものか、小突起だけに留まっているもの(第12図1)の如きものがある。本遺跡出土の土偶を見るとき葛巻町五日市出土の異形土偶(図版20・21)が連想され、¹⁾大洞C₁式の時期の土偶を特色付けるものであることが知られる。なお遮光土偶の眼部の破片がA₁区から1片出土しているが、図示した本遺跡出土の土偶は遮光土偶の後一形態を示す土偶と見たい。

この土偶に関連して、顔面土器(第12図13)の出土を指摘したい。この土器はB地点付近から既に掘り出されていたものであるが、高さ9cm位の台付無文の小形土器の胴部に、沈線をもって顔面



第12図 土偶、土製品、玉類及び顔面土器
〔1～7土偶、8～12土製品、13顔面土器、14～16玉類〕

1) 草間俊一「葛巻町地方の遺物」(岩手史学研究第25号)

を描いてあるものである。顔面を作り付けた土器は、しばしばこれを見ることがあり、県内にも数点これを指摘することは出来るが、描いてあるのはこれがはじめてである。縄文時代の絵画は余り知られていなく、この顔面の描写を絵画として取り上げられるか問題もあるが、とに角珍しい土器として指摘される。しかし顔面だけのところに、顔面作り付の土器とも通ずる点がある。

動物様頭部(第12図8)として指摘したのは、耳が張った小犬の顔貌をした小土製品片で、果して何を象ったものか明らかでないが、特異な土製品として指摘したい。

土笛(第12図9)と称するものは、亀の子形をした中空の土製品で、表裏の一カ所にそれぞれ反対の位置に小孔を開けてあるもので、一方を吹いて音を出す笛の役目をなすものといわれるが、真偽の程は明らかでない。

その他の土製品では径1.8cmの土玉(第12図12)や長さ2cm、径1cmの土製小管玉(第12図11)の如きものがあつたが、その用途は明らかでない。管玉は装身具の一種で、後に石で作るようになった先駆的なものとも見られる。

玉類(第12図14~16)

土製の管玉に関連して、硬玉製の勾玉と丸玉・小玉が各1点ずつ出土した。勾玉は扁平な体部をしたものであり、丸玉は径1.5cmの玉で、中央に一方は大きく他方は小さく穿孔してある。小玉は小さな扁平な輪に作つたもので、径0.8cmで、中央に孔が開いている。

V. む す び

以上豊岡遺跡調査の結果を概略を述べたが、本遺跡は縄文晩期前半C₁式土器とされる時期において最も良く文化の栄えた遺跡であつて、その文化の栄える以前からこの地に文化が発達し、その頃を中心として文化が栄えたが、また衰えて行つたと見られるように思う。その点これ以前の文化が主体をなしたと考えられる一戸町時前台の遺跡より若干時期の後れる遺跡と見ることが出来よう。しかしそれと並んで岩手県内陸部の晩期前半期の土器の様式を示す代表的な遺跡であり、今後更に調査を進めればその内容を更に精しく明らかにすることが出来よう。

今度は短日時の調査であつたが、この時期における岩手県の土器の形式を明らかにすることができたことは幸いであつた。また土偶などにおいてもこの時代の特色を示す一形態が明らかになったことは幸いである。なお“顔面の描かれた土器”の出土など、本遺跡の縄文文化解明の上に持つ重要な意義を知ることが出来る。

図版について

図版の土偶その他の遺物の番号は、挿図第12図と一致させているが、第12図にないものも、20. 21の葛巻町出土のものを除いて、この付近から調査以前に採集されているものである。

